丹波市。
入ったことがある人は少なくなってきたの
迫ります。

丹波の森といっしょに暮らそう
まごころの森林（もり）づくり

問 農林整備課（春日庁舎内）☎ 88 - 5029

森林が75％を占める丹波市

丹波市の森林の総面積は37，156ヘクタールで、市の面積の実に75％を森林が占めています。「丹波の森宣言」で、山の所有者や地域住民が一体となって山を守ることを宣言してから約30年が経過。市民の皆さんが大切に育ててきた木は今、木材として利用できる状態になっています。

しかし、近年の木材価格の低迷や林業従事者の減少・高齢化、自然災害の発生により、手入れの行き届かない森林が増えてきました。その結果、山で水を保ち、災害を防止する力が弱まり、土砂災害が起こりやすくなってきている現状があります。

森林環境譲与税を活用して整備

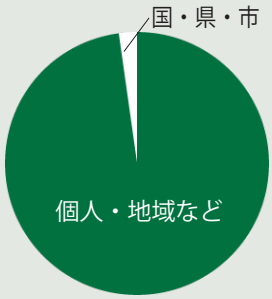
森林をどうやって整備し、活用していくか。丹波市の場合、森林の98％が民有林であるため、市民・森林所有者・森林組合・林業事業者・行政などが協働で「将来の森林づくり」を考えていくことが大切です。

そこで活用したいのが、令和元年度から始まった「森林環境譲与税」。「森林環境譲与税」は、森林整備や木材利用など、使い道を決めて国から配分されるため、民有

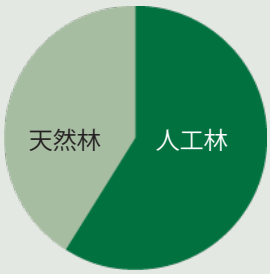
森林の現状

■森林面積 / 37,156ha（県下３位）

■所有者

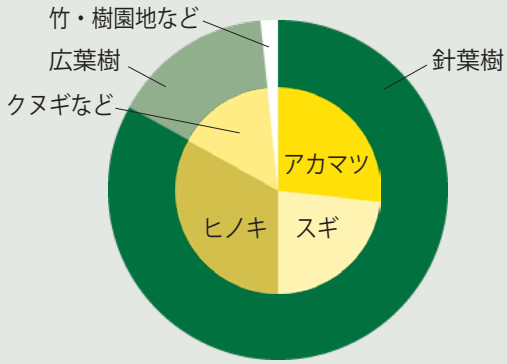


■人工林・天然林

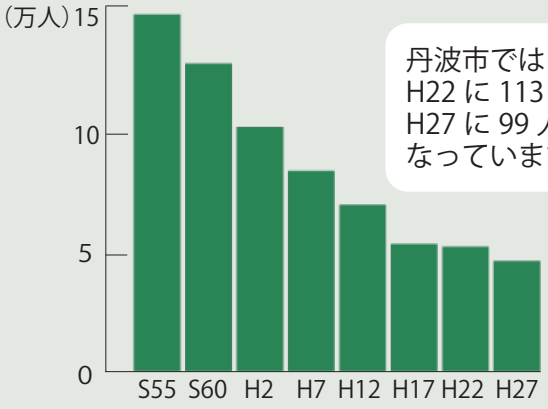


■木の種類

外円：針葉樹・広葉樹　内円：樹種別



■全国林業従事者数（総務省国勢調査による）

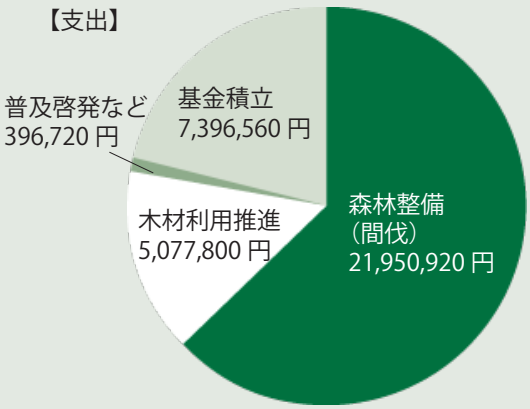


丹波市では
H22 に 113 人
H27 に 99 人と
なっています

森林環境譲与税活用状況

■令和元年度譲与額 / 34,822,000 円

【支出】



面積の 75%を森林が占める、山に囲まれた森林はいつも身近にあるのに、実際に山にではないでしょうか。丹波の森の「今」に

生郷地区　水分れ資料館周辺　※来年３月オープン予定

林の整備を進める大きな追い風になりました。

森林とともに楽しく暮らそう

昨年度は3，４８２万円の森林環境譲与税を活用して森林づくり事業を行いました。また、市民の中でも丹波の森を魅力的にする活動が広がっています。どの方角を見ても山が目に入る丹波市。森林とともに楽しく暮らす方法について、一緒に考えてみましょう。

森林をどう整備するか？

木材生産の場としてだけでなく、地球温暖化の防止や国土の保全、生物多様性を育む土壌として、多様な機能を持つ森林。適切に間伐しないと、地表に日光が届かず、森林全体の力が弱まってしまいます。林業従事者の高齢化や減少が進む中、どうやって整備を進めていけばいいのでしょうか。

1

2

整備前

3

整備後

4

整備前

5

整備後

1_急斜面で作業する森林組合の職員　2_放置され、地表に光が届かなくなった森林。豪雨が発生すると表面の土が流出する危険があった　3_災害対策が施され、光が届くようになった森林。地表の草木の成長にも期待　4_民家に迫る森林。倒木などの危険性があった　5_安心して生活できる環境に整備された

山の整備で災害対策を

山の奥地や傾斜の急な場所では、作業道をつけることが難しく、切った木を車などで運搬することが出来ません。人力で運び出すにも限界があり、木を切ったとしても利用できないため、森林自体が放置されているのが現状です。

そこで、森林環境譲与税を使って、木を運搬せずに済む山の整備事業を行いました。切った木が転げ落ちないように、切り株や立っている木で固定することで、山の表面の土の流出を防ぎ、災害対策と森林整備を同時に行う方法です。木を適切に間伐することで光が入り、地面の草木が育ち、豪雨の衝撃を和らげることができるのです。

民家近くの里山も整備

里山付近の集落では、倒木などによる被害の発生も心配されています。森林環境譲与税を使うことで、自治会や森林所有者の負担なく、民家裏の森林の間伐を行う事業も始まりました。

地元の林業事業者とも協力しながら、これまで整備が出来なかった山の整備を少しずつ進めています。

木材をどう利用するか？

間伐された木は、林業従事者によって出荷されるほか、「木の駅プロジェクト」で薪に加工され、薪ストーブの燃料として市内に循環しています。地域おこし協力隊として、プロジェクトに関わる阪口明美さんに話を聞きました。

1_木の駅プロジェクトの中心メンバー。集まって間伐や薪割りを行う
2_木の伐採は安全第一　3_南油良のストックヤード（木材の出荷場兼薪置き場）

Interview

間伐で山も人もまちも元気にしたい

地域おこし協力隊員になってから、「木の駅プロジェクト」の取り組みを市内全域に広げる活動をしています。

「木の駅プロジェクト」は、市民が切り出した間伐材を薪などに加工し、エネルギーとして市内に循環させる取り組みです。私が運営を支援している木の駅実行委員会では、出荷された間伐材を買い取り、市内で利用できる「たんば共通商品券」で支払いをします。また、支払いの一部は出荷者から山の所有者にも渡るため、エネルギーとお金が地域内で循環する、山・人・まちが元気になる活動なのです。

安全第一で作業を実施

伐採作業には危険が伴います。安全に作業するために、年に数回チェーンソーの使い方や安全管理を学ぶ講習会を実施しています。実際に木を切り倒すところまで実践することで、山での作業が初めての参加者でも、これまで事故なく活動を続けられています。

木材の販路拡大を進める

今後の課題は木材の販路を拡大すること。薪ストーブの魅力を発信するとともに、今年から、丸太に切り込みを入れて地面に立て、そのまま燃やして焚き火を楽しむ「スウェーデントーチ」を販売する予定です。今後も様々な活用方法を考え、木材の利用を進めて行きたいと思います。

問木の駅実行委員会☎090-1962-9357

スウェーデントーチ

地域おこし協力隊
阪口明美（あけみ）さん

薪割り機

地域の森林をどう生かすか？

自分たちの住む地区にも、放置された森林がある…。困った時に、自治会や森林所有者に寄り添い、問題解決に向けてサポートする林業普及推進員という制度があります。林業普及推進員と一緒に、地域の里山整備に積極的に取り組む、生郷地区のみなさんに話を聞きました。

1

2

3

4

5

6

7

話：生郷自治振興会会長　酒井浩二（こうじ）さん、石生区自治会会長　山田康（やすし）さん、林業普及推進員　荻野敏伸（としのぶ）さん

地域に開かれた里山をめざして

（酒井）始まりは、水分れ資料館のリニューアルにあわせて、地域で資料館周辺の里山を整備したいと考えたことです。少しずつ里山づくりの構想を練っている時、平成31年に林業普及推進員の制度が始まり、生郷地区在住の普及員・荻野さんにもお手伝いいただくことになりました。

（山田）木の駅プロジェクトから講師を派遣してもらい、チェーンソーの講習を受けて資料館の裏山を整備しました。荻野さんには現場の作業を主導してもらい、木の活用についてもアドバイスをいただきました。

（荻野）作業場に車が入れる道がないので、切った木を運び出すのが大変でした。リヤカーで運べる長さに切って少しずつ運び出し、木の駅プロジェクトに出荷しました。

林業普及推進員になったのは、山をなんとかしたいと思ったから。普及員に必要な1年間の講習を受けて、安全管理や木の利用について専門的に学びました。学んだことを少しでも伝えていけたらと思います。

（酒井）生郷地区は、第1段階として、水分れ資料館周辺の整備を行い、訪れた人に楽しんでもらいたいと思っています。4月からはカフェ「水分れ茶屋」もオープンしましたし、来年3月の資料館オープンにあわせて、里山の整備も完成させたいと思っています。第2段階として、資料館周辺だけでなく、生郷地区全体で災害に強い里山づくりをめざし、第3段階では、生郷地区を越えて、本州一低い中央分水界をアピールできるようなトレッキングコースを整備できればと考えています。

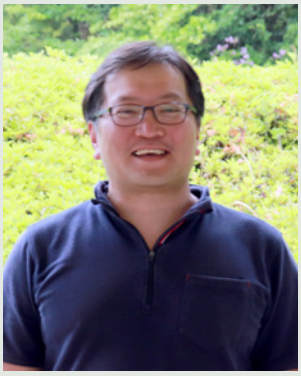
子どもたちにどうつなぐか？

森林は、子どもたちにとって、自然の楽しみ方や危険性を学ぶことのできる場所です。10年前から、子どもが遊べる里山づくり活動を行っている、大路未来会議代表の荻野幸一朗さんに、活動について話を聞きました。

1_地域のみなさんが整備した里山　2_竹や木を手作業で伐採　3_木材はリヤカーで運び出した　4_子どもたちも遊べる空間づくりをめざす　5_4月に水分れ茶屋がオープン　6_冷たい飲み物も販売中　7_手作りの道具類

Interview

「あそびの学校」で楽しく学ぶ



大路未来会議
代表　荻野幸一朗（こういちろう）さん

認定こども園の保護者が中心になって、大路に移住された森林インストラクターの山崎春人（マリオ）さんと一緒に何か楽しいことができないかということで、森林の整備や遊び場づくりを行ってきました。大路小学校の裏山を整備してツリーハウスを作ったり、月に1回さまざまな遊びにチャンレンジする「あそびの学校」を運営しています。

「あそびの学校」では、春は野草を摘んで天ぷらを作り、3月には卒業記念にテントを張って1泊します。その時々で「自分で考える」経験を積み重ね、同時に森の危険を知ることも大切にしています。山に不慣れな子どもたちも、半年くらいで森の中も走れるようになります。そういう楽しい経験が子どもたちの心にも残ればいいなと思います。

現在、大路未来会議の活動は5、6人が中心になって運営しています。最近は新型コロナウイルスの影響であまり活動できていませんが、趣味として楽しみながらやっています。一緒にできる仲間が増えたら嬉しいですね。

1

2

1_「あそびの学校」で山崎さんの話を聞く参加者たち　2_間伐材で作られたツリーハウス

Interview

（山田）里山が子どもたちの活動の場になったら嬉しく思います。回覧板や防災無線などで活動への参加を呼びかけていますので、若い世代のみなさんもぜひ一度里山に入ってみてください。

（左から）酒井浩二さん、荻野敏伸さん、山田康さん